

# 日本語学習者からみたジェンダー言語

阪口 治子

## 1. はじめに

本発表は一般的に性差が顕著に表れると言われている日本語を日本語学習者がどのように捉えているかということを、修士論文で行ったアンケート調査に基づいて報告するものである。

金田一京助が敬語は日本語の極致であり、西欧先進国に類を見せない美しさがあるとした上でその敬語の中でも特に精巧なのは女性語であると日本語のユニークさのひとつに女言葉をあげているように、日本語は伝統的にジェンダーが顕著に表れる言語だと言われている。ステレオタイプの女言葉は丁寧で、当たりが柔らかく、非断定的だと描写されるのに対し、男言葉は相手の感情を考慮せず、ぶっきらぼうであり、断定的であると描写される。

## 2. 先行研究

### 2.1 言語における性差研究

言語における性差は1975年に発表された「Language and women's place」(Lakoff)を契機に国際的な注目を集めるようになったと言われている。Lakoffの論文自体はその研究方法が内省に基づいており主観的であったことから批判を受けたがこの論文から多くの論争、新しい研究が生まれた。ジェンダー言語を研究する際、Robin Lakoff、Dele Spenderなどを代表するフェミニズム論(Gender dominance approach)と、Deborah Tannenなどが率いる文化相対論(Gender difference approach)という二つのアプローチが存在する。フェミニズム論は、男女が異なった話し方をするのは女性がその従属的な社会的地位のために男性と同じように話すことが許されていないためであると主張するのに対し、文化相対論は男女が異なった話し方をするのは彼らが二つのまったく異なる社会言語的サブカルチャーに属しており、根本的に異なった解釈基準に従いコミュニケーションを行うからだと論じている。

### 2.2 日本語におけるジェンダー言語の歴史

日本語において性差は平安時代(9-12世紀)の宮廷文学で初めて観察されると言われ、その後鎌倉、室町、江戸時代を通して女房言葉や遊女語などと呼ばれる性差が明示される女性語が誕生した。続く明治時代、政府は近代国家形成の一環として、日本語を標準

化しその中で女言葉を推進した。女言葉はこの時代、良妻賢母の観念と結びつけられ全国的に普及したと言われており、この明治政府の政策は日本語におけるジェンダー言語のさらなる産出と強化に多大な影響を与えたと考えられている。しかしながら、第二次世界大戦後は、アメリカ合衆国の日本占領、民主主義及び男女平等といった思想の導入、1970年代のフェミニズム運動により、言葉における性差は徐々に減少してきたとされている。

### 2.3 性差の種類

一般的に性差は性差別的意味付け(Sexist semantics)と、性差別的言葉使い(Sexist discourse)の二種類に区分される。性差別的意味付けとは、男女がどんな言葉で話されるかについてであり、男、女、主婦、主人、家内などといった言葉が頻繁に研究されている。性差別的言葉使いとは男女がどんな話し方をするかであり、日本語では性差は特に人称代名詞(わたし、あたし、俺、僕、あなた、お前、貴様 etc)、終助詞(上昇イントネーションのわ、かしら、ぞ、ぜ、ざ etc)、敬語(お／ご接頭辞(お金／金) etc)、命令形(なさい接尾辞(食べなさい)／断定命令形(食べろ) etc)、感嘆詞(まあ、あら、なあ、おい etc)、声の高低、イントネーションなどに観察されると考えられている。

### 2.4 実際の性差、日本語における性差の減少

日本語は多くのジェンダー言語研究者にその特異性を主張されてきたが、最近の研究では日本人男女の実際の言語行動における多様性の存在が確認されている。大阪、神戸、東京在住の男性会社員による会話を調査したSreetharan (2004)の研究は、例えば、実験参加者により使用された終助詞がそれぞれの方言によって大きく異なったこと、またそれだけではなく参加者のうち一人も従来Strongly masculineと区分されている終助詞(ぞ、ぜ、やんげ、じゃいなど)を使用しなかったことを明らかにしている。また東京在住の女子大学生の友人同士の会話を調べた岡本(1995)の研究からは、参加者がNeutralと分類されている終助詞を最も頻繁に使用したこと、また典型的な女性専用助詞とされている上昇イントネーションのわなどは年齢が上の世代の発言を引用する際以外には全く使用されなかったことなどが明らかになった。この研究以外に

も多くの研究が、年齢が人々の言語行動に及ぼす影響を示唆しており若い世代の日本語における性差減少の傾向を指摘している。このように、最近の研究においてジェンダーは男女の言語行動を決定する唯一の要素としては扱われず、話し手の方言や社会的地位、性愛的思考、年齢といったジェンダー以外の話し手の社会的属性、そしてまた話し手と聞き手の関係や、状況のformalityといった会話が行われる状況が言語行動に及ぼす影響も考慮されている。その結果、個人のジェンダーのみでは判断することができない男女の言語行動の多様性が明らかになり、従来のエッセンシャルイズムのアプローチ、つまり女言葉、男言葉をそれぞれバリエーションのない均一な言語であると捉え、これら二言語間に明確な区別を想定することに疑問を投げかけている。また話し手の年齢に注目した研究からは若い世代における性差の減少の傾向が観察されたが、世代方言という言葉が存在するように日本語において話し手の年齢は性差を語る上で欠かせない社会的属性だと考えられる。

### 3. アンケート調査

#### 3.1 研究課題

修士論文では以下問いを調べるために16問からなるアンケート調査を行った。

日本語学習者は

- ・どのように日本社会でのジェンダーを捉えているのか
- ・どのようなジェンダー言語を認識しているのか
- ・日本語における性差と日本社会の関係をどのように捉えているのか
- ・実際にジェンダー言語を使おうとしているのか
- ・ジェンダーを明示することを日本語で学ぶことで自らのジェンダー意識が高まったと感じているのか

#### 3.2 調査対象者

アンケート参加者は67名（男性48名、女性19名）で、大半がSOASの四年生もしくはライデン大学の学生である。参加者の母語は英語、オランダ語が最も多く、全体として93%の参加者がIndo European languageを母語としている。全ての参加者が少なくとも一度は日本に滞在した経験があり、日本語学習歴三年以上の参加者が全体の76%を占めている。男性参加者一名を除き全員が日本語における性差を少なくとも日本語クラスまたは日本人との交流どちらか一方を通して学んだと

回答している。<sup>1</sup>

#### 3.3 日本語学習者による日本社会でのジェンダーのとらえ方

Second language learners' perception of gender in Japanese society

Q1. 日本社会において男女は異なった社会的地位をもつと思いますか。

日本において男女は異なる社会的地位をもつと感じているかという問いに対して、回答者の95%が男女は異なる社会的地位を持っており、男性が女性より優位に立っていると回答している。反対に女性が優位にいと答えたのは男性回答者一名のみで、男女各々一名ずつが男女は日本社会において同じ社会的立場にあると回答している。

#### 3.4 日本語学習者によるジェンダー言語認識

Second language learners' perception of gendered language in Japanese

Q2. 性差を反映していると思う日本語の言語表現や、話し方の例などを挙げてください。

日本語学習者がどのようなジェンダー言語を認識しているかを調査するために、参加者に性差を反映していると考えられる言語表現を選択形式ではなく任意に回答させたところ、表1のような答えが挙げられた。

最も多かった回答は終助詞で80%の参加者によって挙げられ、次いで66%が人称代名詞を挙げている。この結果は終助詞、人称代名詞は大多数の回答者にとってジェンダーの象徴となる言語表現であるということを示唆していると考えられる。これらの回答を分析してみるとステレオタイプの描写が頻繁に観察された。例えば、以下の回答例1が示すように終助詞のわは女性専用のものとして描写された。

回答例1

- ・「女性は終助詞のわを使う」  
'woman use wa-suffix'
- ・「わ：女の子のための文末表現」  
'wa: at the end of sentences for girls'
- ・「女性はいつもわとますと言っている」  
female saying wa and masu all the time'
- ・「女性：わ、かしら」  
'female: wa, kashira'

表 1

	カテゴリー	回答例	%
1	終助詞	わ、そ、せ、の、よ、ね、な、け、かしら、かな	80
2	人称代名詞 (1 人称、2 人称)	1 人称：僕、俺、わし、おいら、あたし、わたし 2 人称：君、あなた、あんた、お前	66
3	音韻論の変数	声の高低 女性：より高い 男性：動詞の否定形やい形容詞などでの二重母音減少 スグー；女性：すごい、 イントネーション	29
4	丁寧さ	女性：より丁寧	25
5	語彙項目の選択 (人称代名詞と終助詞を除く)	Sexist nouns : OL、サラリーマン 特定の形容詞の使用：かわいい 俗語的表現 名詞：飯 動詞：食う 感嘆詞：女性：あら；男性：おい	23

これらの例のように終助詞わを回答として挙げているものの中には、イントネーションについて言及してあるものが一つもなかったことから、これらの回答者にとって終助詞わとは、上昇イントネーションのもののみを意味しているということが想像される。しかしながら実際には Sreetharan (2004) の研究から明らかなように終助詞わには上昇イントネーションのわのほかには下降イントネーションのわという二つのタイプがあり、前者は典型的に女性用の終助詞と認識されているが、後者は男性にも使用されることが知られている。また、岡本 (1992, 1995) などの研究から若い世代の女性は、ごく稀にしか女性用、上昇イントネーションのわを用いないこと、またどの男性による使用も大きく減少していることが明らかになっているように実際の助詞の使用状況は非常に多様である。しかしながらこれらの回答例からもわかるように、多くの回答でステレオタイプの描写が顕著に確認されたことから、学習者の認識が実際の日本語母語話者の言語使用状況から逸脱したものとなっていることが観察される。

#### 3.4.1 ステレオタイプを生み出す要因

##### 1) 日本語教育

回答が終助詞と人称代名詞に集中したことから、そしてまた回答がステレオタイプであったことは、日本語教育の在り方と関係があり得る。大原のグループ (2001) は、終助詞わが日本語の教科書においていかに描写さ

れているかを調査し、多くの教科書が実際の日本語における言語行動の多様性を無視し、ステレオタイプのな使用法のみを紹介していることを明らかにした。彼らによると、『*Situational Functional Japanese*』は例えば、わを女性専用終助詞のみとして描写しその他の説明を一切与えていない。また Siegal (1995) が主張しているように、従来のクラスルームカリキュラムの多くは学習者の社会言語学的言語能力の養成に力を入れないため、教室での指導が単にこのような教科書の説明に基づき行われ、その際十分な説明がなされないことも頻繁にあると考えられる。このような状況では学習者が男女の実際の言語行動の多様性について考える機会を全く与えられないと言えるのではないかと。

また一人の女性回答者の以下のコメントによってサポートされているように、人称代名詞と終助詞は日本語の授業において初期段階にそして明示的に指導されることが多いようであるが、これもまた回答がこの二つのフォームに集中したことに関係があると考えられる。

##### 回答例 2

「私たちが初めて習ったのはジェンダーによって使い分けられる私、僕、俺など英語の 'I' のための表現だ。大学でさらに勉強するにつれて普通形の文の語尾で女性はわやの男性はだよ、だねなどを使うということを勉強した。また、かしらなどの女性のための文

末語尾も習った。これらは私が日本人の友達と話している時も明らかに観察される。」

‘The first thing we learned was expressions for ‘I’ (watashi, boku, ore, etc), depending on gender. As we study further at university, endings of plain-form sentences such as wa and no for women and men use *dayo* or *dane*. Also *kashira* as a sentence ending for women. These were also apparent when speaking with Japanese friends.’

## 2) Non-native perception

上記のコメントはそれだけではなく *hypernativization* を引き起こし得る *non-native perception* の存在も示唆している。*non-native perception* とは、第二言語に学習者の母語にない性質があるために学習者にはその性質がより際立って感じられる現象であり、学習者が特定のフォームを母語話者以上に多用する *hypernativization* につながることもある。前述したように、最近ではの、よ、ねといった終助詞は男女ともに使われ、そしてまた若い女性によるかしらや上昇イントネーションのわの使用も劇的に減少していることが多くの研究によって明らかになっている。しかしながらそれにもかかわらず、上記の回答者（回答例2）の母国である英語には終助詞やジェンダーによって使い分けられる人称代名詞が存在しないため、この学習者にはこれらの日本語の性質が実際より顕著に感じられるのである。過半数の回答者の母語が日本語のこのような区別をもたないためにこれらの日本語の性質は学習者にはより顕著に感じられ、それゆえに学習者が極端にそれらに対し敏感になる可能性は十分にあると考えられる。

## 3) 母語話者の言語行動についてのコメント

Lexical choice を性差が表れている言語表現だとした回答者のなかから以下のようなコメントが得られた。

### 回答例3

- ・「母語話者数人が中年女性のみがあらまを使用すると述べた。」  
‘Some native speakers told me that only middle-aged women used *arama* ‘oh well’
- ・「男友達がぶちやばいなどといった表現を使っているのをみて、女友達がこの表現は女の子が使うととても不適切で変だと話した。」  
‘A male friend mentioned expressions such as *buchi yabai* ‘very chancy (slang expression)’ and then a female friend told me those are very inappropriate and strange for a girl’
- ・「友達は私に女性として食うと言うべきではない

がもし話者が男性であれば使用可能だと言った。」

‘My friend told me that I should not say *kuu* ‘eat: vulgar expression’ as a woman, but it is allowable when the speaker is man.’

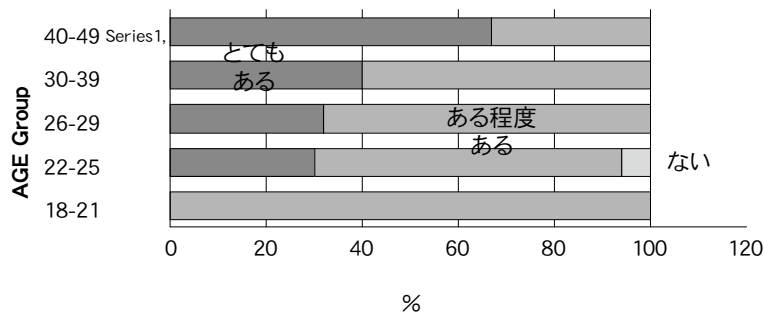
これらコメントは日本語母語話者の発言もまた学習者がジェンダー言語認識を構成する過程に大きな影響を及ぼすということを示唆している。ここで問題となるのは、Hanks (1993) などが主張するように、学習者だけではなく母語話者もまた実際の言語使用状況の詳細を見落としステレオタイプのみ集中する傾向があるために、こういった母語話者から発せられる言語行動についてのコメントは多くの場合、部分的であり実際の使用状況を十分に説明しているわけではないということである。こういった母語話者の記述的ではない規範的なコメントもまた学習者がジェンダー言語に対しステレオタイプのイメージを抱くことに関係があると考えられる。

Q3. 日本での経験を通して実際に男女の話し方に違いがあると思いますか。

日本での滞在経験を通し、実際に男女の話し方に違いが存在すると感じるかという問いに関して、二名の回答者を除く全ての回答者が‘とてもある’または‘ある程度ある’と回答している。興味深いのは、年齢別のパターンが観察されることである。回答者の年齢が低くなるにつれ、際立った性差を感じている人の割合も少なくなっている。グラフ1が示しているように40代の回答者のうち67%が男女の話し方の違いがとてもあると答えているのに対し、30代では40%、20代後半では32%、前半では30%、10代後半では0%と徐々に少なくなっている。

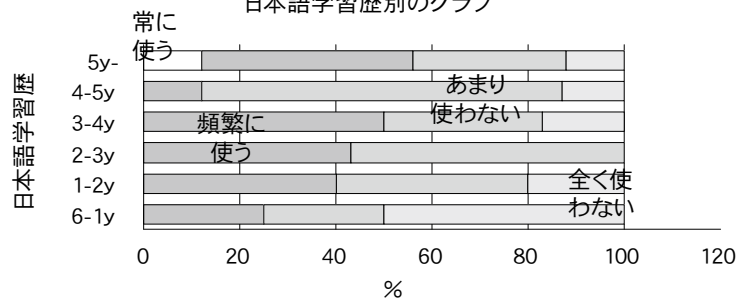
この結果は、日本語母国話者の実際の傾向と一致する。最近の研究の多くが少なくとも一定の会話コンテキストにおける若い世代の日本語の性差減少を示唆しているが、アンケート参加者のうち10代後半から20代のグループは、主に学生でありその多くが日本の大学で留学生として滞在している。それゆえ彼らは最も多くの時間を自分たちと同じ世代の日本人大学生と過ごしてきたと考えられ、性差が比較的少ないと言われる若い世代の日本語を耳にする機会を多く得たと考えられる。またレイノルズ (2000) の研究などが示唆するように日本語における性差は一度社会に出て働き出す、もしくは結婚すると顕著になると言われているが、留学生としてのみ過ごした若い世代に比べ、年齢

グラフ1  
年齢別のグラフ



グラフ2

日本語学習歴別のグラフ



の高い学習者は日本社会でのアルバイト以外の労働経験、もしくは少なくとも日本人社会人との直接的な交流があったのではないかと想像される。それゆえに世代の高い学習者が、日本語における性差をより感じるのは当然の結果であると考えられる。

### 3.5 日本語学習者におけるジェンダー言語使用

Second language learners' use of gendered language

Q4. 日本語を話すときに積極的にジェンダーフォームを使っていますか。

日本語を話す際に実際に性差を表すフォームを使用するかという質問に対しては、半数以上の学習者が(55%) 全く使わない、またはほとんど使わないと回答した。結果を分析するとジェンダーフォームの頻繁な使用は学習者の日本語学習歴、滞在歴と関係があることがわかった。日本語学習歴を例にとってみると、例外も観察されるものの、学習歴が長くなるにつれジェンダーフォームを使用すると答えた学習者の割合も高くなっている(グラフ2)。

Q5. ジェンダーフォームをほとんどもしくは全く使わないのはなぜですか。

ジェンダーフォームを全くもしくはほとんど使わないと答えた参加者にその理由を複数回答可で尋ねたところ、正確なもしくは適切な使い方がわからないという回答が最も多く(65%)、予想されるようにこの回答は日本語学習、滞在歴が短い学習者の間でより頻繁に挙げられた。回答者の22%が、ジェンダーフォームを馬鹿げていると感じるために使用しないと回答しており、それに関係してジェンダーフォームをジョークとしてのみ使うという回答も得られた。また16%は、ジェンダーフォームを使わない理由の一つとしてそれらに付随する性差別を拒絶しているためであると答えている。この答えは男性より女性の間で顕著に観察された。その他、以下のようにジェンダーフォームを用いない理由としていくつか興味深いものも挙げられた(回答例4)。

#### 回答例4

- ・「外国語では中立的立場にとどまりたい。」  
'I like to remain neutral in a foreign language.'
- ・「ジェンダーフォームは大体俗語で使われるが、

私は大体丁寧に話す。」

‘They are usually used in slang and I mostly speak somewhat polite.’

- ・「日本の航空会社で働いているので正しい日本語を話さなければならない。」

‘I work at Japanese airlines so I have to use correct Japanese.’

#### 4. おわりに

今回のアンケートでは日本語学習者がいかに日本語の性差を捉えているかを調査したが、その結果は、学習者のジェンダーだけではなく年齢も回答に影響を与えているということを示唆した。

またアンケートの結果から学習者の大半が、ジェンダー言語のステレオタイプのイメージを抱えおり、実際の多様性を考慮に入れていないという可能性も明らかになった。学習者がステレオタイプの方に集中してしまう理由として、本発表では日本語教育、Non native perception、そして日本語の母語者との交流の影響を簡単に考察した。

これらステレオタイプのイメージを学習者の頭の中に植え込むのを避けるためには、日本語教育関係者は規範的情報ではなく記述的情報に基づき、常に多様性を意識しながらジェンダー言語を指導することが有効であると考えられる。また日本語母語話者も、自らが抱えるジェンダー言語に対するイメージが実際の使用状況をいつも忠実に反映しているわけではなくステレオタイプのであり得ること、そしてそれだけではなく自らが学習者にとって常に文化的情報源になり得ることを意識し、学習者に接する必要があるであろう。

#### 参考文献

Endo, Orie. 1997. *Onna no kotobano bunkashi*, Tokyo: Gakuyou shobo.

Hanks, William F. 1993. Metalinguage and pragmatics of deixis. In *Reflexive language: reported speech and metapragmatics*, ed. Lucy, John A., 127-158. Cambridge: Cambridge university press.

Lakoff, Robin. 1975. *Language and Woman's place*. New York: Harper and Row Publishers, Inc.

Ohara, Yumiko, Scotto Saft, and Graham Crookes. 2001. Toward a Feminist Critical Pedagogy in a Beginning Japanese-as-a-Foreign-Language Class. *Japanese Language and Literature*, 35. No. 2:105-133.

Okamoto, Shigeko and Shie Sato. 1992. Less feminine speech among young Japanese females In *Locating power: Proceedings of the Second Berkeley Women and language conference*, ed. Hall, Kira, Mary Bucholtz and Birch Moonwomon, 478-488. Berkeley: Berkley Women and Language Group.

Okamoto, Shigeko. 1995. ‘Tasteless’ Japanese: Less ‘feminine’ speech among young Japanese women. In *Gender Articulated: Language and the Socially Constructed Self*, ed. Hall, Kira and Mary Bucholtz, 297-325. New York: Rutledge.

Reynolds Akiba, Katsue. 2000. Nihongo ni okeru seisaka. In *Joseigaku Kyoiku no Chosen: Riron to Jissen*, ed. Watanabe, Kazuko and Chieko Kanaya, 38-46. Tokyo: Tokyo Meiseki Shoten.

Siegal, Meryl. 1995. Individual differences and study abroad: women learning Japanese in Japan. In *Second language acquisition in a study abroad context*, ed. Freed, B.F., 225-244. Amsterdam: John Benjamins.

Sreetharan, Cindi Strutz. 2004. Japanese Men's linguistic stereotypes and realities. In *Japanese Language, Gender and Ideology: Cultural models and Real People*, ed. Okamoto, Shigeko and Janet S. Shibamoto Smith, 275-290. Oxford: Oxford University Press.

#### 注

- 1 時間及び知識不足により記述的分析のみを行ったため統計的有意性は示されていない。